

## 番外謡曲引詩考

西 畑 実

## は じ め に

謡曲の引詩に関する調査には、佐成謙太郎氏の「謡曲と漢詩——謡曲引詩考——」（『能楽全書』第三卷所収）、拙稿「信光の能と漢詩」（『大阪樟蔭女子大学論集』第六号所収）がある。しかし、前者は現行曲のみを扱ったものであり、後者は室町時代（慶長以前）の成立と推定されている番外謡曲を対象としたものであって、今日までに伝わっている曲のすべてにわたっているわけではない。謡曲において、いかなる漢詩が引かれているか、また、それがいかに取扱われているかを見るには、室町時代の古作のみならず、江戸時代の新作についても、考察を行なう必要があるであろう。それで、この機会に翻印されている番外謡曲で、前記の拙稿に洩れたものにおける引詩を紹介し、もって研究者の参考に供したいと思う。

この調査において、主なる出典とその引詩数を示すと、『和漢朗詠集』百三十一、『白氏文集』（『和漢朗詠集』、『新撰朗詠集』所収の詩を除く）一八（序一）、『三体詩』十四、『新撰朗詠集』八、

『百聯抄解』四、『本朝文粹』二ということになる。『和漢朗詠集』がその大半を占めていることは、上記の二つの調査の結果と同様であり、江戸時代の新作においても、人口に膾炙している詩句が引用される傾向が強いことを物語っている。

番外謡曲における引詩の形態については、「信光の能と漢詩」に説いておいたが、このたびの調査においても、ほぼ同様のことがいえる。漢詩が謡曲のいかなる小段に引かれているかという点、サシの類に用いられている場合がもっとも多く、クセがそれにつづくが、この事実は、詩句が登場人物の心情を語るのに多く利用されていることを示すものにほかならない。

同一の詩句がしばしば用いられていることも、また、室町時代の作品の場合と同じである。それは、もちろん、一般的に漢詩の方が和歌よりも耳遠いことによるが、多くは後代の謡曲が先行作品の詞章を借用する場合の尠くないことに帰せられよう。

漢詩が概して一曲の部分的な場面を彩るものとして使用されていることは、すでに佐成氏が指摘されている。この傾向は、番外謡曲

においても認められるのであって、じじつ、漢詩を主材とした曲は比較的少ないのである。

次に示す引例は、『謡曲叢書』、『謡曲全集』、『謡曲全集（国  
民文庫）』、『謡曲評釈』、『謡曲三百五十番集』、『新謡曲百番』、  
『刊番外謡曲（古典文庫）』、『番外謡曲（続（古典文庫）』、『未刊謡  
曲集（古典文庫）』から採った。なお○印を附したのは、佐成氏の引  
詩考ならびに拙稿「信光の能と漢詩」に見えていない詩句である。

(一) 和 漢 朗 詠 集

逐吹潜開 不待芳菲之候 迎春乍變 将希雨露之恩（紀淑望）

夫風おつてひそかに開く、芳菲ハツヒの候をまたず、春を迎へて忽ち  
に變ず、まさに雨露の恩をねがはんとす（古典文庫本「祇園詣」）  
風を逐て潜に開く、芳菲ハツヒの候をまたざる梅花の神コウとは、我事  
なり（古典文庫本「丁固」）

池凍東頭風度解 窓梅北面雪封寒（藤原篤茂）

実々雪は封（じ）て寒く、窓の梅の北面ならねど 爰も越路  
に 近き国の（古典文庫本「夏雪」）

東岸西岸之柳 遅速不同 南枝北枝之梅 開落已異（慶滋保胤）

縦へば東岸西岸の柳、遅速こそ有りと、南枝をとむる事は岸  
にありとて（新謡曲百番本「材本義平」）

氣霽風梳新柳髮 氷消浪洗旧苔鬢（都良香）

柳の風に靡くを見て、氣霽れては風新柳の髪を梳るといふ句の  
うかびて、其下の句を、暫く案じたたずむ処に、此朱雀門の上

よりも、鬼神忽ち顯れいで、さもあらげなき声うちあげて、氷  
消えては浪旧苔の鬢を洗ふと、その下の句をつぎしなり（謡曲  
叢書本「朱雀門」）

立ち帰り旧苔の、鬢を洗ふと句をつぎし、作者は我といひ捨て  
て、忽ち奮進の鬼神と成つて失せにけり（同）

氣はれては 風しんりうのかみをけづり、氷消ては 浪きうた  
いの鬢をあらふ（古典文庫本「天童鬼神」）

花下忘帰因美景 樽前勧醉是春風（白樂天）

有明のひかりさす盃もかずそひて、帰らん事や忘るらん（謡曲  
叢書本「岩瀬」）

美景に依つて人心の、酔を進むる花の陰（謡曲叢書本「華自然  
居士」）

花のもとに帰らん事を忘るるは、美景によりて人心、飽くとし  
もなき木の下、桜は色に出にけり（新謡曲百番本「留春」）

花のもとに 帰らんことを 忘るるは 美景によるの 友にま  
見えんと 恥かしながらも、顯はれたり（古典文庫本「兼載  
桜」）

花の下に帰らん事を忘るるは、かかる 美景にもやよりける  
と、思はるれ共花見る友の（古典文庫本「桜之前」）

本よりすきの樽の前、酔をすすむる友もがな（古典文庫本  
「須磨狸々」）

花の本に帰らん事を忘るるは、美景によつてなり、樽の前に酔  
をすすむるは是春の風（古典文庫本「花宴」）

○歌酒家花処廻 莫空管領上陽春（白樂天）

さらでだに春の心は長閑ならねば、歌酒家々花所々に、人はを  
もてあそぶに（古典文庫本「桜之前」）

背燭共憐深夜月 踏花同惜少年春（白樂天）

燭を背けては共に憐む深夜の月、花を踏んでは同じく惜む少年の、春過ぎ秋を迎へても（謡曲叢書本「佐保川」）

共に憐む深夜の月、花を踏んでは同じく惜む少年の、余波の袖も有明の、夜もしらじらと明行けば（新謡曲百番本「生田忠度」）

あれは共 いはば像や消なまし、消ずは争灯を、背（く）なよ  
我詞、嗔恚の焰身を焦す（古典文庫本「石竹」）

灯をそむけては、ともに哀む深夜の月 花をふんでは同じくお  
しむ少年の春（古典文庫本「染衣」）

兒童と共に舞樂を奏し散花を、踏て夜すがら慰めんと 同じく  
惜む少年の、春の遊びの戯れに（古典文庫本「布袋」）

倚松根摩腰 千年之翠滿手（尊敬）

松根に倚つてきる枝は、緑と友にたかふよ（古典文庫「妓女谷行」）

春來遍是桃花水 不弁仙源何処尋（王維）

春きては、普く是桃花の水（古典文庫本「為家」）

春之暮月 月之三月 天醉于花 桃李盛也（菅原道真）

王母が盃の、光もさし添へ廻るにも、天花に酔へり、桃李も盛  
なり（謡曲叢書本「政徳西王母」）

留守の間忙ぶる盃の、花にな酔はせ給ふかや（新謡曲百番本「定家桜」）

此山桜一しほに、詠に続く折なれや、空さへ花に酔へるらん  
（新謡曲百番本「留春」）

たうりのせんじんけんばいに以て、空さへゑる花盛（古典文庫本「兼載桜」）

是も色有春の空、天も酔ぬる花心の、いざいざ舞をかなでん  
（古典文庫本「東山」）

紅花の あした紅錦の 盛り、天も酔かも、けをさるる有様  
（古典文庫本「百紅葉」）

礙石遅来心竊待 牽流過過手先遮（菅原雅規）

童子に酒を進めしは、いとど心は無明の盃、流に引かれて、心  
浅く酔ひ臥して（謡曲叢書本「語酒吞童子」）

流に浮ぶ盃の、曲水の宴を初めん、手先さへぎる盃、所は山路  
の菊の酒か、面白や（新謡曲百番本「許由」）

廻れや盃の、流は菊水の 流に引れてとく過れば、手先 さへ  
ぎる此水を（古典文庫本「和泉監將」）

盃よりは祐経を、一さし指てともかくも、なりもやせんと思ひ  
切、手先 さへぎる打刀、忍びに手をかけたりけるが（古典文庫本「対面曽我」）

政本は膳を引よせつつ、手先さへぎる盃に、腰よりやうでうぬ

き出（だ）して、しばしが間ぞしらべける（古典文庫本「狸鼓」）

夏は涼しき ながれの水に さかづきをうかべて 手先さへぎ  
る (古典文庫本「玉簪」)

岩にさへられておそく来れば、手先遮る花の枝 (古典文庫本「為家」)

いとど心は無明の盃 りうにひかれて谷ニ水の 心浅くも酔臥  
て (古典文庫本「幽霊酒吞童子」)

○伍翅沙鷗潮落曉 乱絲野馬草深春 (菅原道真)  
うしほの落る曉は、沖のかもめに心そへ (謡曲叢書本「玉津鳥  
童神」)

人無更少時須惜 年不常春酒莫空 (小野篁)

凡人間のあだなる事を案ずるに、人更に若きさかりなし、終に  
は老と成るぞかし (謡曲叢書本「七面」)

いかにかたがたに申候、人更に若き事なし、終には老の波より  
あひて御遊び候へ (古典文庫本「御渡」)

○惆悵春婦留不得 紫藤花下漸黄昏 (白楽天)

分行袖の永き日も、やたそかれは覺束な、花さきかかる藤原  
の、ふるき都に着にけり (古典文庫本「藤原宮」)

鷗既鳴兮忠臣待旦 鶯未出兮遺賢在谷 (謝觀)

実や古き詩に鷗既に鳴て、忠臣あしたをまつときく、かかるき  
どくの鳥なれば (古典文庫本「初雪鷗」)

鶯声誘引来花下 草色拘留坐水辺 (白楽天)

聞くも妙なり、うぐひすの、声に誘引せられしも、時えて神の  
告げなりと (謡曲叢書本「根芹」)

長楽鐘声花外尽 竜池柳色雨中深 (李嶠)

夫長楽の鐘の声は花の外に尽きぬ、竜池の柳の色は雨の中に深  
し、此心にも似たと申候 (古典文庫本「藤崎」)

養得自為花父母 洗来寧弁葉君臣 (紀長谷雄)

養ひ得ては花の父母、母さへびやうかに臥し給へば、御葉の為  
に佐保川の (謡曲叢書本「佐保川」)

草木は地より生ずれども、雨露をえて養ひの、しえふの緑栄え  
ゆく、花のかぞいろの恵みの春は絶えせず (謡曲叢書本「敷地  
物狂」)

薄暮曇れる春の雨の、やしなひえぬれば花の父母、あはれむべ  
しやをしむべさ (謡曲叢書本「素拝桜」)

養ひ得ては花の父母と、雨を人にもたとへたり (新謡曲百番本  
「松の雪」)

花新開日初陽潤 鳥老婦時薄暮陰 (菅原文時)

花の新に開くる日、初陽うるほふ朝霞、鳥の老いて帰る時、薄  
暮曇れる春の雨の (謡曲叢書本「素拝桜」)

斜脚暖風先扇処 暗声朝日未晴程 (慶滋保胤)

夫花は斜脚の暖風にひらけて、同じく暮春の風にちり (古典文  
庫本「行滝」)

○白片落梅浮澗水 黄梢新柳出城牆 (白楽天)

白片の落梅は澗水に浮び、黄ッ梢の新柳は城牆より出たり  
(古典文庫本「花西行」)

誰言春色従東到 露暖南枝花始開 (菅原文時)



春の色は東より、来ると云ふに朝がすみ、引きかへ我は東路に  
 (謡曲叢書本「鳳来寺」)

よし足引の山桜、花も開くる初めは南枝ぞと、尋ね行末に(新  
 謡曲百番本「足引」)

誰かいひし春の色東より来るとは、南枝露暖かに、先咲き初む  
 梅の花(新謡曲百番本「鶯宿梅」)

夫草木無心たりといへ共、花実の時節をたがへず、陽春の春に  
 随つて、南枝より花初めて開く(古典文庫本「布引松」)

夫草木心なしとは申せ共、花実の時をたがへず、陽春の徳を備  
 へて南枝花始て開く(古典文庫本「睦月桜」)

○梅含鵝舌兼紅氣 江弄瓊花帶碧文(元稹)

梅は鵝舌を含んで紅氣を兼たり、江は瓊花を弄して碧文を帯

たり(古典文庫本「花西行」)

梅は鵝舌を含んで紅氣を兼たり(古典文庫本「百紅葉」)

巫女廟花紅似粉 昭君村柳翠於眉(白楽天)

ふんのほどこすかはの色、昭君が柳の眉、かつらをのこもかく

こそと(謡曲叢書本「高野敦盛」)

花明上苑 輕軒馳九陌之塵 猿叫空山 斜月鑒千巖之路(張翥)

花上苑に明かに、輕軒九陌の塵つもり、白雲かかる山ざくら

(謡曲叢書本「岩瀬」)

遙見人家花便入 不論貴賤与親疎(白楽天)

此山本の殊更人家も稀なるに、さればこそ遙に人家を見て、花  
 ある時にもあらざれば(謡曲叢書本「薄」)

貴賤と親疎を分かず、花に興有る春の空(謡曲叢書本「華自然  
 居士」)

遙かに人家を見て花有れば便ち入る、貴賤と親疎を分かず(同)

咲くや桜の言の葉の、多き内にもある詩に曰く、遙に人家を見  
 て花あれば、すなはち入る、貴賤と親疎を論ぜざるは、春の情

と聞く物を(謡曲叢書本「不断桜」)

和歌の道をば白雪の、花あれば人家に入、あるじは誰と問事な  
 かれと候ぞや(古典文庫本「二位尼」)

仰尤にて候去ながら、其上花の本には貴賤と親疎とを論ぜずと  
 社申候へ(古典文庫本「花宴」)

はるかに人家を見て花あればすなはちいる、論ぜず貴賤と親疎  
 とをわきまへぬをこそ、春のならひと聞物を(古典文庫本「花  
 見」)

瑩日瑩風 高伍千顆万顆之玉(菅原文時)

入日にみかく玉衣の、入日にみかく玉衣の、風にさらせる夕べ

かな(古典文庫本「二本杉」)

誰謂花不語 輕漾激兮影動脣(菅原文時)

花もの云はぬ草木なれど、影くちびるを動かしつつ、とるや調

子を松風の声(謡曲叢書本「不断桜」)

輕漾激して影脣を動かす(古典文庫本「鶯」)

輕漾激として影脣を動かす(古典文庫本「難波梅」)

誰か言(つ)し、花物いはず、輕漾激として、影脣を動(か)  
 す(古典文庫本「玉川」)

実やしはれ行く 花の物云よしもなく、かげ唇も動かねば（古典文庫本「和光」）

朝踏落花相伴出 暮随飛鳥一時帰（白楽天）

朝に落花を踏で相伴つて出で、夕べには飛鳥に随つて一時に帰る（新謡曲百番本「柏木」）

夫朝に落花を踏で あひともなつて出、夕べには飛鳥に随て

一時に帰る（古典文庫本「東山」）

○悵望慈恩三月尽 紫藤花落鳥関関（白楽天）

慈恩に悵望す三月尽きぬ、紫藤の花落ちて鳥関関たり（謡曲叢書本「藤浪」）

紫藤露底残花色 翠竹烟中暮鳥声（源相規）

紫藤露底残花の色、緑の松の煙の内に、鳥の声する春の山風

（新謡曲百番本「鎌倉山」）

○晚藥尚開紅躑躅 秋房初結白芙蓉（白楽天）

晚藥猶開く紅躑躅、秋の花ぶき初めて結ぶ、白芙蓉（謡曲叢書本「躑躅」）

夜遊人欲尋來把 寒食家応折得驚（源順）

夜遊の人は尋ね來つてとらんと欲す。寒食の家に折りえて驚くべし（謡曲叢書本「躑躅」）

又てきよくは夜遊の人の、折得ておどろく、色とかや（古典文庫本「花実童子」）

点著雌黃天有意 款冬誤綻暮春風（藤原実賴）

誰か云し、款冬誤つて暮春の風に綻ぶと（新謡曲百番本「款

冬」）

くわんどあやまつて暮春の風にはころび（古典文庫本「花実童子」）

龜頭竹葉経春熟 階底薔薇入夏開（白楽天）

もたひのほとりの竹葉は春を経て熟し、階のものと薔薇は、夏に入てひらく（古典文庫本「瓜」）

もたひの辺りの竹葉は、春をへて熟すとか、橋の本のしやうびは 又夏に入りてぞ開くなる（古典文庫本「長伯仙人」）

風吹枯木晴天雨 月照平沙夏夜霜（白楽天）

又夏の夜の 平砂を照す月影も、雪に見なして待人の、其言の葉もあらたなれ（古典文庫本「雪月花」）

池冷水無三伏夏 松高風有一声秋（源英明）

誰る知る行く水に、三伏の夏も無く、潤底の松風、一声の秋を催す事、草木迄もおのづから、見仏間法の結縁なり（新謡曲百番本「大原詣」）

九夏三伏の夏の日も、風一声の秋ありて、四時にし其色の、ことはにして変らぬは（新謡曲百番本「松竹」）

松高ふして風一声の秋冷じく、氣疎<sup>ケツキ</sup>鼻のから声に（古典文庫本「伶倫」）

螢火乱飛秋已近 辰星早没夜初長（元稹）

螢火乱れ飛んで秋既に近く、はや暮過る野辺の気色、あら物さびしの有様な（古典文庫本「螢」）

○憶得少年長乞巧 竹竿頭上願絲多（白楽天）

されば織女の、願ひの糸の色々に、おもひ得たり竹竿 頂上に  
願<sup>グン</sup>絲多しと 歌書、竹葉にかけつつ 軒の隙もる星祭り (古典  
文庫本「現在錦木」)

林間煖酒焼紅葉 石上題詩掃綠苔 (白楽天)

林間に酒をあたたためて、紅葉を濁醪の盃も重り、土器取る手も  
たゆく (謡曲叢書本「語酒吞童子」)

林間に酒を煖めて紅葉を焼くとかや (謡曲叢書本「変化信之」)  
庭に散り敷くもみち葉を、かき集め林間に、酒暖めて紅葉は、

煙と共に立ちのぼる (謡曲評釈本「清閑寺」)  
林間<sup>林間(下村本・田安本)</sup>に酒をあたたためて、紅葉を焼<sup>焼(下村本)</sup>と言置しも、今此時かや面白

や (古典文庫本「鸚鵡鳥」)

紅葉をたく、あたため酒も 身にしむ空に (古典文庫本「玉  
箒」)

林間に酒をあたたためて、紅葉を<sup>ダッブツ</sup>濁醪の盃も、かさねかはらけ  
とる手もたゆく (古典文庫本「幽霊酒吞童子」)

○楚思渺茫雲水冷 商声清脆管絃秋 (白楽天)

楚思森茫として、雲水冷まし、商声清脆としては管絃の秋 (謡  
曲叢書本「辛崎」)

○大底四時心惣苦 就中腸断是秋天 (白楽天)

大抵四時心すべて苦しむ中にも、就て腸を断つは秋の天 (新謡  
曲百番本「鈴蟲」)

○望山幽月猶藏影 聴砌飛泉転倍声 (菅原文時)

山を望めば幽月猶影を隠す、砌を聞ば飛泉うたた声をます (古

典文庫本「小侍従」)

秋夜長 夜長無眠天不明 耿耿残灯背壁影 蕭蕭暗雨打窓声  
(白楽天)

秋の夜長しよながふして眠る事なければ、天も明(け)ず耿耿  
たる灯に、光をそふるがごとく成 (古典文庫本「人形文学異  
本」)

○燕子楼中霜月夜 秋来只爲一人長 (白楽天)

燕子楼中 霜月の夜、秋来は只我 独りのみ長うして、閨情頻  
に堪やらず (古典文庫本「須磨寺」)

蔓草露深人定後

終宵雲尽月明前 (小野篁)

蔓草露深し、人定後、終宵迷頭の雲つきて、本有円成  
の月明の前、荒面白の、時節やな (古典文庫本「小菰」)

織錦機中 已弁相思之字 擣衣砧上 俄添怨別之声 (公乘億)

されば錦を織る機物の、うちには、想思の字をあらはし、衣う  
つ礫の上には、怨別のうきも雲晴れて、月明らけき今宵の空、  
詠めうれしき、ところかな (謡曲叢書本「錦織」)

三五夜中新月色 二千里外故人心 (白楽天)

和歌のはまれ世に勝れ、月を友とし花に愛、二千里の外に心を  
尽し (謡曲叢書本「清水小町」)

三五夜中の新月、二千里の外迄も見えて隠れぬ高野寺の、鐘は  
枕に響けども (謡曲叢書本「高野敦盛」)

面白や三五夜中の新月の色、二千里の外に至る迄、普く広き御  
恵み、仰ぎても猶あまりあり (謡曲叢書本「琢鹿」)

三五夜中新月の色、二千里の外の故人の心（謡曲叢書本「月少女」）

殊に今宵は三五夜中、二千里の外も雲晴れて、浦わも清き夜塩かな（新謡曲百番本「難波狸々」）

曇らぬ月の光添ふ、三五の千代若、新月の千代光、二千里の外ぞなつかしき（新謡曲百番本「箱崎物狂」）

窓の月に古人を忍び、実には白居易が詩に、三五夜中新月の色、二千里の外故人の心（新謡曲百番本「歎冬」）

面白や三五夜中の新月の色、二千里の外の故人の心も、おもひやらるるばかり也（古典文庫本「夢想松風」）

いかに旅人、今宵は三五夜中の新月の色、二千里の外の故人の心迄、おもひしられたり（古典文庫本「夢一字」）

其年月を数ふれば、大治五年の仲秋、三五夜中の新月の、影も輝く雲間より（古典文庫本「和光」）

秋水漲来船去速 夜雲收尽月行遲（野展郢）

折節秋の水、漲り落ちて去る舟の、跡立隠す夕霧の、深き思に臥沈む（新謡曲百番本「舟戻」）

早明方の天の戸に、嵐烈しく吹落て、浪立騒ぐ秋の水、漲落ちてすさまじや（新謡曲百番本「竜神七夕」）

夜の雲おさまり月のちる事、おそくとも、みなぎり舟のさる事は、するやかなり（古典文庫本「鞍馬判官」）

船もさることを忘れよ 月も行事おそかれ（古典文庫本「文僧都」）

○不是花中偏愛菊 此花開後更無花（元稹）

誠に此花ひらけて後、更に花なしと作られし、心の花は末の代まで、くちまじき黄金きく、思ひ出の詞なるべし（謡曲叢書本「翁草」）

白菊の花の、情を受るや、秋の夜の、上こそ花は、またもあらじと、袂を返して、失にけり（古典文庫本「一本菊」）

松樹千年終は朽 權花一日自為榮（白樂天）

誰か百年を送る、權花一日の榮に同じ（謡曲叢書本「東海寺」）思ふ思の胸の煙、晴らすは一夜の契にて、只是權花一日の榮に同じ（新謡曲百番本「露の宮」）

誠に權花一日の、さかりの内か夢の世に（古典文庫本「生捕盛久」）

誰あつて百年を送る、權花一日只同じ（古典文庫本「紙屋川」）

盛は 又衰へあり、權花一日の 榮花にひとしかるべし（古典文庫本「人形文学異本」）

それ電光石火權花の榮、いつまで草のいつまでも、ながらへ果ぬ身にしあれば（古典文庫本「山中常盤」）

松樹千年終に朽ぬ、權花 一日のゑい 思へば是も浅からず（古典文庫本「竜」）

不堪紅葉青苔地 又是涼風暮雨天（白樂天）

絶ず紅葉 青苔の地、又是涼風 此日も暮なん（古典文庫本「笈搜」）

万里人南去 三春鴈北飛（韋承慶）

万里に人南にさり、三春にかり北にとぶ（謡曲叢書本「敷路物狂」）

○切切暗窓下 嘸嘸深草中（白樂天）

切切たる暗窓の下、嘸嘸たる深草の草の裏よりも、在し姿を二

たび顚し、まみえ申すなり（新謡曲百番本「鈴蟲」）

蒼苔路滑僧帰寺 紅葉声乾鹿在林（温庭筠）

蒼苔道滑らかにして僧寺に帰り、紅葉声乾て鹿林にあり（古典

文庫本「鳥辺野露」）

蒼海 道なめらかにして、僧寺に帰れば（古典文庫本「古市童

神」）

○可憐九月初三夜 露似真珠月似弓（白樂天）

憐むべし九月初三の夜、露真珠に似月弓に似たり（古典文庫本

「紫野露」）

○露滴蘭叢寒玉白 風銜松葉雅琴清（源英明）

露蘭叢に滴りて、寒玉しろく 風松樹を含で、雅琴清し（古

典文庫本「小萩」）

八月九月正長夜 千声万声無了時（白樂天）

千声万声 砧の響きも 皆是便（り）と 虚空に翔り（古典文

庫本「再現山姥」）

うかむ世もなくうつ砧の、千声万声つくるともなきくるしみの

（古典文庫本「十市」）

八月九月正に長き夜、千声万声のむつことを、頼みし人は夢とな

り（古典文庫本「和光」）

北斗星前横旅鴈 南楼月下擣寒衣（劉元叔）

北斗の星の前には、旅雁を横たへ、南楼の月のもとには寒衣を

うつと、雲の中より答へしも此門にすむ、鬼神の詩なりとは、

しろしめさずや、旅人よ（謡曲叢書本「朱雀門」）

又南楼の月影に、うちし碯も遠夫の、夜さむを歎く恋衣（謡曲

叢書本「錦織」）

三秋岸雪花初白 一夜林霜葉尽紅（温庭筠）

三秋の岸に雪ッ花初て白し、一夜の林に霜ッ葉悉（く）紅

なり（古典文庫本「豊原寺」）

暁入梁王之苑 雪滿群山 夜登庾公之樓 月明千里（謝觀）

暁梁王之苑にあれば、雪群山に滿つ、実に絶もなき詠かな（新

謡曲百番本「松の雪」）

暁梁王之苑に入れば、雪群山に滿（て）り、夜庾公が楼に登り

て、月を樂（し）む千里の秋（古典文庫本「夏雪」）

暁梁王之園に入ざれども、雪群山に滿 庾公が楼も目下、月千

里に、明らかなり（古典文庫本「戴安道」）

彼唐土の梁王之、そのふには入ざれど、雪群山にみつとかや

ゆふかうが楼にのぼらねど、月千里にあきらかなり（古典文庫

本「雪山」）

あかつきりやわうの、そのに入て雪、ぐんざんにみち、よる、

ゆうこうがろうにのぼれば月、千里にあきらか也（古典文庫本

「謡物雪山」）

雪似鷺毛飛散乱 人被鶴氅立徘徊（白樂天）



誠に 雪は我毛（鵝毛）に似人（下村本・田安本）は、鶴髦をひらいて、立て徘徊す（古典文庫本「咒咀顯光」）

吹風は空より 鵝毛をふらし 寄来る浪は 鶴髦を頼（頼み）み（下村本）（古典文庫本「戴安道」）

あら面白の雪の日や、鵝毛に似て、飛で散乱する人は、鶴髦をきて立て はいくわいし給ふや（古典文庫本「雪翁」）

○氷封水面聞無浪 雪点林頭見有花（菅原道真）

雪林頭に点じて見るに、花有気色何の時には是にしかん（古典文庫本「戴安道」）

春風暗剪庭前樹 夜雨偷穿石上苔（傳温）

春のかぜ 空に吹らん庭前の詠めもあかぬよるの雨 石上のこけや茂るらん（古典文庫本「二本杉」）

山遠雲埋行客跡 松寒風破旅人夢（紀齊名）

想ひ像る、心ばかりはさはらじを、何隔つらむ峯の雲、跡を埋めば杳々と、山より山や伝ふらむ（新謡曲百番本「許由」）

余りに山を遠く来て、雲又跡を立隔て（新謡曲百番本「盛近」）  
山遠ふしては雲行客の跡を埋み 松寒ふして風、旅人の夢を破る（古典文庫本「丁固松」）

白く雲跡を埋んで、往來の道もさだかならず、晴嵐夢を破つては、其おもかげも見えざりけり（古典文庫本「文僧都」）

山遠しては雲行客の跡をうづみ、松寒うしては風旅人の夢をやぶる（古典文庫本「藤代峠」）

行ば東のはてしなき 行ば東のはてしなき 雲又跡を埋むらん

（古典文庫本「富士天狗」）

○陶朱辞越之暮 眼混五湖之煙（大江以言）

愚なりとよ唐の范蠡が越をじせしも、無欲の忠に似たれども、命を断てば不忠なり、陶朱が五湖の波の上、世を背きたる一声は、聞きたからずの問答や「謡曲叢書本「植田」」

越を辞せし范蠡が、扁舟に棹を移すなる、五湖の煙の波の上も、かくやと思ひ知れたり（古典文庫本「法海寺」）  
越を辞せし范蠡が 扁舟に棹を移すなる、五湖の 煙の浪の上、かくやと思ひ知（ら）れたり（古典文庫本「北国落」）

九夏三伏之暑月 竹含錯午之風 玄冬素雪之寒朝 松彰君子之徳（源順）

玄冬素雪の寒き夜は、あら浅まし身の身の上やな（新謡曲百番本「大磯」）

或は玄冬素雪の雪、積りて寒き朝には、君子の徳を顕すとは、松に寄りの詞なり（新謡曲百番本「松の雪」）

九夏三伏の暑き日には、竹錯午（サツゴ）の風を含み、玄冬素雪の寒き朝には 松君子の徳を顕す（古典文庫本「阿古屋松」）

されば大夫といふ松の 恥かしながら栖をも 君子の徳と 顕はして（古典文庫本「文僧都」）

十八公栄霜後露 一千年色雪中深（源順）

されば古き詩にも松を題して、十八公の栄は霜の後に顕れ、一千年の色は、雪のうちに深し（新謡曲百番本「松の雪」）

夫十八公の栄は、霜の後に顕れ、一千年の色は雪の中に深し

(古典文庫本「阿古屋松」)

然るに松は常盤の色をまし、十八公の粧ひ絶ず (古典文庫本「布引松」)

○含雨嶺松天更霽 焼秋林葉火還寒 (大江朝綱)

夫雨をふくむ嶺松は、天更に晴たり、秋を焼林葉は、火帰つて

寒し (古典文庫本「筆捨松」)

煙葉蒙籠侵夜色 風枝蕭颯欲秋声 (白樂天)

竹林遙に 見渡せば、煙<sup>モウロウ</sup>葉<sup>モウロウ</sup>蒙籠として、夜色を犯<sup>ヲカ</sup>す、風

枝蕭颯として、秋の声より、冷しや (古典文庫本「石竹」)

○草色雪晴初布瀟 鳥声露暖漸綿蜜 (大江朝綱)

綿<sup>マン</sup>鷹と和らげる鶯の 声も姿も、金衣の袖 (古典文庫本「七十

二候」)

鶴帰旧里 丁令威之詞可聴 (郡良香)

ねふる程なき老の鶴、旧里に帰り今は又、もとの親子に逢事

も、一世に限る道とかや (謡曲叢書本「敷路物狂」)

○叫漢遙驚孤枕夢 和風漫入五絃彈 (源順)

漢に叫んでは遙かに驚かす孤枕の夢、風に和してはみだりに入

る五絃の彈 (謡曲叢書本「赤壁」)

巴峽秋深 五夜之哀猿叫月 (謝観)

哀猿腸を断つ 悲しみ、いま目の前にあはれなり (謡曲叢書本

「切兼曾我」)

人家も遙に遠ざかり、峯に哀猿呼で腸を断つ (古典文庫本「伶

倫」)

○江従巴峽初成字 猿過巫陽始断腸 (白樂天)

哀猿腸を断つ 悲しみ、いま目の前にあはれなり (謡曲叢書本

「切兼曾我」)

子を思ふ夜の鶴 腸を断猿の声 何れか哀れならざらん (古典

文庫本「鏡池」)

木ずゑの旅の一さげび はらはたをたつ心地して (古典文庫本

「梶井宮」)

猿三声さげびては はらわたをたつとかや (古典文庫本「天狗

倒」)

人家も遙に遠ざかり、峯に哀猿呼で腸を断 (古典文庫本「伶倫」)

○人煙一穗秋村僻 猿叫三声曉峽深 (紀長谷雄)

猿三声さげびては はらわたをたつとかや (古典文庫本「天狗

倒」)

第一第二絃索索 秋風松松疎韻落 第三第四絃冷冷 夜鶴憶子籠

中鳴 第五絃声尤掩抑 滝水凍咽流不得 (白樂天)

第一第二の絃は、索索として松の音、第三第四の調べは帰雁

の、なく音おのづから、夢をも覚ます気色かな (新謡曲百番本

「定家桜」)

闇の夜鶴のなく音迄 子を悲しまぬものやある (古典文庫本

「磯松」)

子を思ふ夜の鶴 腸を断猿の声 何れか哀れならざらん (古典

文庫本「鏡池」)

第一第二の絃はさくさくとして秋の風、松を払てそいん落、第

三第五の絃は、滝水むせんで流るる事を得ず、荒物すごの夜す

がらやな（古典文庫本「弘文成」）

尋ねめぐる親は子を、思ひの闇の夜更鶴（注）鶴を籠へ籠の内に鳴哀れ

をば（古典文庫本「密語橋」）

其音はさくさくたる 雨の暮の、一絃を弾ず 調子に響き（古典文庫本「琵琶池」）

竜門原上土 埋骨不埋名（白楽天）

実にはや竜門原上にかばねをさらすといへども、武将の誉れの名をば埋まず（謡曲叢書本「義興」）

かく洪恩の君の為、竜門原上の、土に屍は晒すとも、惜しかる

まじき命かな（新謡曲百番本「大森彦七」）

さんげにうれへげん上にうれふ、ほねを埋める土猶かはくひま

なし（古典文庫本「常楽」）

みどりの苔の其下に、かたちはうづめども、うづもれぬ名を夕

附日（古典文庫本「兼好法師」）

○新豊酒色 清冷於鸚鵡之盆中

長楽歌声

幽咽於鳳皇之管裏

（公乗憶）

新シ豊ウの酒の色、長楽の哥の声、幽咽ユウエツとして香ばしく（古典文庫本「根元猩々」）

唐太子賓客白楽天亦嗜酒

作酒功讃以継之（白楽天）

琴詩酒と聞くも隔てぬ友人の、いつも変らでしゆこうざんに、

酒を愛せしこし方の（謡曲叢書本「狛形猩々」）

琴詩酒と聞くも隔てぬとも人の、いつも変らで酒功賛に、酒を

愛せしこし方の（謡曲叢書本「七人猩々」）

かの楽天と聞へしも、琴詩酒を友となし、酒功讃を作れり（古典文庫本「生捕盛久」）

○茶能散悶為功浅 萱萱忘憂得力微（白楽天）

茶は能息（傳本）通りを散ずれ共、功をなす事浅し、萱は忘れへを忘る

るといへ共、力をうる事微也（古典文庫本「金沢猩々」）

○酒是下若村之所伝 傾甚美（大江朝綱）

酒は是、下若村が伝ふる所、傾（く）れば甚（だ）美なり（古典文庫本「根元猩々」）

○先逢阮籍為郷導 漸就劉伶問土風（橘在列）

先阮籍に逢て郷導キヤウダウす、漸（く）劉伶に就て土風を問（古典文庫本「根元猩々」）

○王勣郷霞繁浪脆 嵇康山雪逐流飛（慶滋保胤）

王勣郷霞（傳本）は浪を繁フクて脆し、嵇康山が雪は流れをおふて飛、

あら面白（傳本）の 理りやな（古典文庫本「根元猩々」）

○黛色迥臨蒼海上 泉声遙落白雲中（賀蘭遂）

黛の色は遙に蒼海の上に望み、泉の声は遙に白雲のうちより落

つ（新謡曲百番本「久能」）

○勝地本来無定主 大都山属愛山人（白楽天）

勝地はもとより定める主なし、凡そ山は山を愛する人に属す

（新謡曲百番本「久能」）

○朝候日高冠額拔 夜行沙厚履声忙（聯句）

折しも五月闇、暗さは暗し降る雨に、砂うるほひて音音さらに

無かりけり (新謡曲百番本「甘樂大夫」)

強呉滅分有荊蕀 姑蘇台之露濃濃 暴秦衰兮無虎狼 咸陽宮之煙  
片片 (源順)

きやうごほろびてけいきよく有 <sup>ママ</sup> こうたいの露しやうしやうた  
り ぼうしんおとろへてころうなし 咸陽宮の煙へんべんたり

(古典文庫本「正成」)

荒籬見露秋蘭泣 深洞聞風老松悲 (源英明)

是は一樹の陰深み、深洞に風冷じく、老猿声悲しびて (謡曲叢  
書本「語酒吞童子」)

秋蘭泣深洞に風を聞は老松悲しむ、問人なければおのづから、  
門は葎に閉られて (古典文庫本「人麿 (人麿西行)」)

壺中天地乾坤外 夢裏身名旦暮間 (元稹)

壺中の天地は乾坤の外、夢裡の身名は旦暮の間 (謡曲叢書本  
「孫子邇」)

謬入仙家 雖為半日之客 恐婦旧里 纔逢七世之孫 (大江朝綱)

七世の孫にあふことも、神のむかしのためしかや (国民文庫本  
「浦島」)

実にやあやまつて半日の客たりしも、今身の上に知られたり

七世の孫に逢心地して 扉をひらく蜚 <sup>シツ</sup> させとは鳴な (古典文  
(新謡曲百番本「盛近」)

庫本「友鳥」)

桃李不言春幾暮 煙霞無跡昔誰栖 (菅原文時)

桃李物いはず、春幾日過ぎぬ、ゑんか跡なし昔かな (新謡曲百

番本「沼搜」)

桃梨をたけば物云ず、木石と社人はみれ (古典文庫本「妓女谷行」)

○遺愛寺鐘欬枕聴 香鑪峯雪撓簾看 (白樂天)

こを以ておもんみるに、遺愛寺の曉の鐘の枕には、今古仏性  
の夢を覚し (謡曲叢書本「野寺」)

香爐峯の雪をば、簾をかかげて是を見る (新謡曲百番本「松の  
雪」)

山路日落 滿耳者樵歌牧笛之声 潤戸鳥歸 遮眼者竹煙松霧之色

(紀齊名)

実にや笛竹のよよの契りも徒らに、野を分けて幽かなる、樵歌  
牧笛の声までも、行方を頼む心かな (新謡曲百番本「笛物狂」)

山路に日暮ぬ樵調牧童の声 (新謡曲百番本「盛近」)

山路に日暮耳にみてる物は樵哥牧笛の声、潤戸鳥歸り眼にさへ  
きる物は竹煙松霧の色、あら心すこの庵室やな (古典文庫本  
「赤間関」)

山路に日暮ぬ樵歌牧笛の声、人間万事様様の、営むわざにやつ  
れゆく (古典文庫本「滝文字」)

本より樵哥牧笛とて 草刈の笛木こりの哥は (古典文庫本「須  
磨山路」)

実御不審は御理り去ながら、樵哥牧笛と申時は、いかでおとが  
め有べきぞ (古典文庫本「常緑」)

人屋遠き野原を分、夕陽既にかたぶけり、遠くして樵夫の音な  
ふ声もなく、牧笛の笛も猶まれ也 (古典文庫本「人丸西行」)

山路に日暮ぬ樵哥牧笛の声、人間万事様様の、世渡るわざの浅ましきよ（古典文庫本「藤代峠」）

○守家一犬迎人吠 放野群牛引犢休（都良香）

家を守る一犬は、人に向ひて吠え、野に放つ群牛は、小牛を牽て休む（新謡曲百番本「許由」）

実や野に放つ群牛は、犢を引て休み、家を守る一犬は、人に向て吠ると聞（け）ば（古典文庫本「瓜」）

三千世界眼前尽 十二因縁心裏空（都良香）

或時都良香竹生鳥詣でありしに、湖水の致景打ち詠め、三千世界は眼の前に尽きぬと作りければ御宝殿、頻りに揺ぎ動きつつ、気だかき神の御声して、十二因縁は心のうちに空しと、あらたに示しおはします（謡曲叢書本「朱雀門」）

湖上遙かに見渡せば、三千世界は目の前につき 十二因縁は心の中にむなし（古典文庫本「春之夜」）

願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤 齏為当来世世讚仏乗之因転

法輪之縁（白樂天）

おもひうかれて立ち舞ふ姿は、狂言綺語の、たはむれと思へども、讚仏乗の因なれば（謡曲叢書本「思妻」）

元来狂言綺語なれば、いでいでさらば舞はんとて（謡曲叢書本「辛崎」）

さればかりなる謔も、讚仏乗の因なれば、蝴蝶の夢のたはぶれに（謡曲叢書本「松浦梅」）

仮初ながら是とても、讚仏乗の因縁と覚しめし、吾が跡とはせ給へやと（新謡曲百番本「鶯宿梅」）

狂言綺語も法の縁と夕日影に立出て（新謡曲百番本「柏木」）

狂言綺語の戯れごとに、花鳥風月を縁として、無常菩提に至らしめ（新謡曲百番本「花鳥風月」）

狂言綺語も世中の、戯なりや諸共に、かなでていざや謡はむ（新謡曲百番本「狩場重光」）

謡ふ心も狂言綺語の、物語と成るこそめでたけれ（新謡曲百番本「舟戻」）

願くは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤りを以て齏し、当来世世の讚仏乗の因、転法の縁となさん（古典文庫本「赤間関」）

何疑ひもあらば社、増てやは人身の 狂言綺語も法の縁と（古典文庫本「鳥羽玉」）

元来狂言 綺語なれば、墨の衣の 袖を返し（古典文庫本「布袋」）よしや只 狂言綺語の謔も、一仏乗の御法ぞと、直道に知べし（古典文庫本「御法」）

狂言きぎよを振捨て、さん仏乗の因縁に、引れて行や西の空の（古典文庫本「昔男」）

○蓮眼豈養清涼水 面月長留十五日（紀齊名）

眼の蓮は豈清涼の水やしなはんや、雨月の長るは十五日の天、あら面白の心やな（古典文庫本「明静」）

○幽思不窮 深更無人之処 愁腸欲断 閑窓有月之時（長説）

幽思極まらず、深巷に人なき処、愁腸絶えんとす、閑窓に月ある時（謡曲三百五十番集本「北条」）



幽志窮<sup>ユウシ</sup>(ま)らず深巷<sup>シンコウ</sup>に人なき所、愁腸<sup>シュチャウ</sup>絶なんとす、閑窓に  
月有<sup>ユ</sup>ルの時(古典文庫本「友島」)

○人間榮耀<sup>エウヤウ</sup>因縁<sup>インエン</sup>浅 林下幽閑<sup>ユウカン</sup>気味深(白樂天)

人間万事の榮耀は因縁浅し、林下幽閑は気味深し、世語は猶も  
耳に聞かじ(新謡曲百番本「許由」)

○都府楼<sup>トホ</sup>纔<sup>シ</sup>看<sup>カン</sup>瓦色 観音寺只<sup>シ</sup>聴<sup>チウ</sup>鐘声(菅原道真)

観音寺の夕の空には、信教真如の眠りをさます(謡曲叢書本  
「野寺」)

後会期遙 霏<sup>ヒ</sup>纓<sup>エウ</sup>於鴻臚<sup>コウロ</sup>之曉<sup>キョウ</sup>涙(大江朝綱)

江の相公の古へ、越路の国に下りしに、旅の別を悲しみて、後  
会期遙なり、纓を鴻臚の曉の涙にうるほすと、長篇の序に書き  
たりしは、(新謡曲百番本「大内裏」)

○万里東来何再日 一生西望<sup>シバウ</sup>是長襟(小野篁)

又我朝の野相公は、一生西に望む事、是長き襟ひと作りて、隠  
岐の流罪を許されしも、是皆詩作の徳ならずや(謡曲叢書本  
「朱雀門」)

蒼波路遠雲千里 白霧山深鳥一声(橘直幹)

蒼波路遠して雲千里、薄霧山深し鳥一声、折柄なれや秋の空、  
浦浪風も心せよ(古典文庫本「富士天狗」)

漢皇三尺之劍 坐制<sup>サセ</sup>諸侯 張良一巻之書 立登<sup>タチノボ</sup>師傳(後漢書)

漢王の三尺の劍、居ながら秦の乱れを治む(謡曲叢書本「植田」)  
沛中三尺の劍は、居ながら諸侯を制し、圯上一巻の書は、立所  
に、師傳にのぼる事も(新謡曲百番本「松竹」)

抑劍の名高きは、漢の高祖の三尺の劍 居ながら西北を制すと  
かや(古典文庫本「髭伐」)

四海安危<sup>アンイ</sup>照掌<sup>テウサウ</sup>内 百王理乱<sup>ヒヤクオウリ</sup>懸心中(白樂天)

四海の安危を掌に治むる処に(新謡曲百番本「現在実盛」)  
実や三皇五帝の跡を継、豊成世を受継て、四海の安危は掌の内  
に極め(古典文庫本「荊軻」)

刑鞭<sup>ケイベン</sup>蒲朽<sup>ホコウ</sup>蛭空<sup>セウクウ</sup>去 諫鼓<sup>ケンコ</sup>苔深<sup>タイシン</sup>鳥不驚(小野国風)

鳥居の筭木も苔むして、鳥おどろかぬ代代までも、残す岩門の  
御神楽を暫く待たせ給はば(謡曲叢書本「鉦女」)

音せぬ鼓苔むして、鳥驚かぬ君が代を、仰ぐも愚かなるべしや  
(謡曲叢書本「堯舜」)

げに政徳の御代なれば、刑鞭蒲朽ちて、蛭むなく、諫鼓苔深  
うして鳥驚く事なし(謡曲叢書本「政徳西王母」)

諫鼓苔むし鳥もおどろかぬふる事を、引もすがるもささがにの  
(謡曲叢書本「玉津島竜神」)

夜はしらじらと花より明くれば、諫鼓苔むし鳥驚かぬ、諫鼓苔  
むし鳥驚かぬ、春の木陰と成にけり(新謡曲百番本「柏木」)  
きねがおさむる御でぐらの、古き鼓もうちしづめ、驚かぬ鳥が  
ねの(古典文庫本「今泉」)

諫鼓の莓露<sup>メロ</sup>深く、刑鞭の蒲なを朽て、野のすゑ山の奥までも、  
おもんばかり事なければ(古典文庫本「回向院」)

諫鼓苔むし 鳥驚かず、天下を守り 治め給ふ(古典文庫本  
「松竹」)

三尺劍光氷在手 一張弓勢月当心 (陸輦)

一張の弓のいきほひ月むねに有り、是は真如の月弓の、悪魔も  
いかで恐れざる (謡曲叢書本「梶原座論」)

三尺の劍の光は氷手に有、一張の弓の勢ひは、月心に當る、荒  
騷しの修羅の戦ひやな (古典文庫本「躑躅岡」)

雄劍在腰 抜則秋霜三尺 (源順)

かいた劍は腰にあり、ぬけばその色秋の霜 (謡曲叢書本「軈」)  
灯暗数行虞氏涙 夜深四面楚歌声 (橘広相)

四面に楚歌の声に、敵を射る矢の衡鐃の、陰冷まじく風落ち  
て (謡曲叢書本「現在殺生石」)

灯暗うしては数行虞氏が涙の雨と降りぬるおもかげも、今に知  
らるる我袂、実に類なきあはれかな (謡曲叢書本「月見」)

四面に楚歌の声声や、敵は寄すると夕風の (新謡曲百番本「勝  
頼」)

胡角一声霜後夢 漢宮万里月前腸 (大江朝綱)

よよのかんきうに、つてきの一せい前後の恨 (新謡曲百番本  
「笛物狂」)

○倭琴緩調臨潭月 唐櫓高推入水煙 (源順)

和琴ゆるくしらべて短月に望み、からろ高くおさへて水イ煙  
に入ル (古典文庫本「蜜語橋」)

○老眠早覚常残夜 病力先衰不待年 (白楽天)

老の眠は覚る事早くして常に夜を残す 精汁は先衰て夢更に  
短し (古典文庫本「幽霊小町」)

琴詩酒友皆抛我 雪月花時最憶君 (白楽天)

琴詩酒の友も其名に大江山、生野の道は遠ければ、未暁もみぬ  
山下の、一樹の陰なれや、此酒聞し召れよ (謡曲叢書本「語酒  
吞童子」)

琴詩酒と聞くと隔てぬ友人の、いつも変らでしゆこうざんに、  
酒を愛せしこし方の (謡曲叢書本「狛形狸々」)

琴詩酒と聞くと隔てぬとも人の、いつも変らで酒功賛に、酒を  
愛せしこし方の (謡曲叢書本「七人狸々」)

琴詩酒の情を知るも是みな、花に和らぐ友とかや (新謡曲百番  
本「更科祐近」)

袖に廻らす盃の、琴詩酒のたはぶれも、法の友 (古典文庫本  
「駒形狸々」)

猶頼もしき仰事、あだには受じ琴詩酒の、友さへひとし心く  
む、奥は鞍馬の山桜 (古典文庫本「常盤問答」)

立よらせ給ふ御事こそ、琴詩酒の友もかくやらん (古典文庫本  
「牡丹」)

袖をめぐらす盃の きんししゆの友も かくやらん (古典文庫  
本「三河狸々」)

琴詩酒の 友も其名に大江山、幾野の道の遠ければ、まだ ふ  
みも見ぬ山したの、一樹の陰なれや、此酒聞し召れよ (謡曲叢  
書本「幽霊酒吞童子」)

○長夜君先去 残年我幾何 秋風襟滿淚 泉下故人多 (白楽天)

長夜もしまづさる残年、我幾ばく何ぞ秋風袂にみつ (古典文庫

本「桐壺」

往事渺茫都似夢 旧遊零落半歸泉（白樂天）

往事渺茫として都て夢に似たり（古典文庫本「弥子」）

金谷醉花之地 花毎春匂而主不帰 南樓嘲月之人 月与秋期

而身何去（菅原文時）

禁獄に花を詠じつつ、栄花は先に立ぬれど、無常の風に誘はる

南樓の月をもてあそぶ 徒も、月に先だち、有為の雲に隠

れぬる（古典文庫本「現在敦盛」）

心為恩使 命依義輕（後漢書）

弓箭の道にいればこそ、恩の為にもつかふなれ、又命を輕んぜ

んとするも心にも任せず、進退是に合まりぬ（謡曲叢書本「鶴

若」）

命は義に依てかろし、いかでか恩を報ぜざらん（古典文庫本

「瓜」）

忠臣の命は義によつて惜まぬを、官を盗み禄を貪る、世の

有様ぞ浅ましき（古典文庫本「関羽」）

捨る命は本よりも、儀による物と理りを、誰白ま弓弓取の（古

典文庫本「杉本楠」）

翫其磧礫不窺玉淵者 曷知驪竜之所蟠（左太冲）

髭切と申に、日頃は玉殿に住驪竜の髭切、今は磧礫に住小虫

の、髭切にも劣るべし（古典文庫本「髭切」）

言下暗生消骨火 咲中偷鋭刺人刀（惟良春道）

笑ひの中に人を刺す、刃の上をやみやみと（新謡曲百番本「鎌

田」）

嘉辰令月飲無極 万歳千秋樂未央（謝偃）

行末千代と菊の酒受れば月の盃の、影清きことぶき、嘉辰令月

とは 此時をいふぞ目出たき（古典文庫本「籠景清」）

長生殿裏春秋富 不老門前日月遲（慶滋保胤）

長生殿に春秋富めり、幾年雪は不老門、善哉善哉と感じ給へば

（謡曲叢書本「神渡」）

しながら長生殿の内にこそ、春秋を富、不老門の前には日月遅

しと、今此御代に知られたり（新謡曲百番本「田鶴」）

長生殿の内不老門の前とも、斯る事をぞ申すべき（新謡曲百番

本「御駒乗」）

実や善をつむ、門の前には月と日の、光の陰もおそければ、老

せぬ事も理りや（古典文庫本「今泉」）

実や年をへて 老せぬ門の外までも 日月おそき名所かな（古

典文庫本「回向院」）

又長生殿不老門に至り、栄花を極め候（古典文庫本「象」）

更闌夜静 長門闌而不開 月冷風秋 团扇查而共絶（張文成）

更闌け夜静かにして、声するものは鶏の、羽音もすぎき山道を

（謡曲叢書本「変化信之」）

ある夜月冷じく風秋なるに内侍は、半簾を卷かせて（謡曲叢書

本「往生院」）

更闌け夜静に、月の光も かかやきて（新謡曲百番本「材木義平」）

更闌夜静にひらけざるに、影のごとくに見へ給ふは、此世には

なき古しへの、姿頭はし給へるか（古典文庫本「卒都婆子」）

夜更人静まりて、風冷しく、月秋なるに（古典文庫本「唐反魂香」）

○行宮見月傷心色 夜雨聞猿断腸声（白樂天）

行宮に月をみては、心を傷ましむるいろ、夜の雨に鈴を聞ては  
腸を断声有（古典文庫本「唐反魂香」）

春風桃李花開日 秋露梧桐葉落時（白樂天）

春風桃李花のひらくる時、秋露梧桐葉の落る夕（古典文庫本「小式部」）

○夕殿蜚飛思悄然 秋灯挑尽未能眠（白樂天）

せきでんに蜚飛でおもひ消然たり、秋の灯火がかげ尽してねむ  
る事あたはず（古典文庫本「恋草」）

観身岸額離根草 論命江頭不繫舟（羅維）

それ身を観ずれば、岸の額に根を離れたる草、命を論ずれば、  
江のほとりに繫がざる舟（新謡曲百番本「宇治物狂」）

それ身を観ずれば岸の額に根をはなる草、命を論ずれば、江の  
頭に繫がざる船（新謡曲百番本「義興」）

倩我身を観ずれば、岸の額に根を離れたる草、命を論ずれば、  
江の辺りに繫ざる船（古典文庫本「井手詣曽我」）

夫身を観ずれば岸の額に根を離れたる草、命を論ずれば、江の  
辺りに繫がざる船（古典文庫本「北白川」）

夫身を観ずれば岸のひたひに根を離れたる草、命を論ずれば、  
江の辺りにつながざる舟（古典文庫本「弘文成」）

夫身を観ずれば、岸の額に根を離れたる草、命を論ずれば、江  
の辺りに繫ざる船なれや（古典文庫本「初瀬詣」）

身を観ずれば岸の額に根を離れたる草、命を論ずれば江の辺り  
につながざる舟（古典文庫本「文物狂」）

まとはれきぬる人の世の、あだなる事を観ずれば、朝顔の、朝  
日まつ間の花の露、江のほとりに、つながぬ舟の風情也（古典  
文庫本「夢想松風」）

○年年歳歳花相似 歳歳年年人不同（宋子問）

歳歳又歳歳の、花相似たり歳歳、又歳歳人同じからずとや（新  
謡曲百番本「宇治物狂」）

年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず（新謡曲百番本  
「柏木」）

人間は四時の形替らねども、年年歳歳人同じからず（古典文庫  
本「根元菟」）

年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず（古典文庫本「文  
物狂」）

蝸牛角上争何事 石火光中寄此身（白樂天）

思へば同じ夢の間の、蝸牛の角の上、石の火の世中に、何を諍  
ふ種とせん（新謡曲百番本「生田忠度」）

実にや蝸牛の諍ひを、よそに思ひし疎きよ（新謡曲百番本「石  
山義衡」）

石の火の光のうちに、此身を寄するなる（新謡曲百番本「宇治  
物狂」）

蝸牛の角のあらそひ、今生纔の飯の宿りに、いつ迄も猶有がほ  
の（古典文庫本「紙屋川」）

○生者必滅 釈尊未免梅檀之煙 樂尽哀來 天人猶五衰之日（大  
江朝綱）

生ずるものは必ず滅す、釈尊も未梅檀の煙をまぬがれず、樂し  
みつき悲しみ來る、天人も猶五衰の日に逢へり（謡曲叢書本  
「厚婦」）

樂しみ尽きて悲しみ來ると、云ひけん事も偽りかな（謡曲叢書  
本「靱」）

生ずる者は必ず滅すといへども、魄は残りて闇浮の世に、猶晴  
れやらぬ妄執を（新謡曲百番本「柏木」）

生ずる者は必（す）滅す、釈尊も未せんだんの煙をまぬかれ  
ず、樂しみ尽て憐（かなしみ）み來る、天人も猶五衰の日にあへり（古典  
文庫本「文物狂」）

朝有紅顏誇世路 暮為白骨朽郊原（藤原義孝）

朝に紅顏有つて世路に誇れば、夕べには白骨と成つて郊原に朽  
ちぬ（謡曲叢書本「辛崎」）

朝に紅顏あれども、夕べには白骨と成る（新謡曲百番本「大原  
詣」）

朝には紅顏あり、世路に誇れども、夕べには白骨と成る身の末  
ぞはかなき（新謡曲百番本「宇治物狂」）

実にはや人、世路にほこると申せども、夕べにはいつとなく、郊  
原に朽ちし身の果、惡源太義平が、其亡魂の來りたり（新謡曲

百番本「材木義平」）

人はただ、榮花の枝を広くつらね、錦の袖を重ねつつ、世路に  
誇ると申せども、やがて白骨と成て、郊原に朽ちぬべし（新謡  
曲百番本「信田」）

されば世中の有為転變の道理、つくづくと觀するに、朝に紅顏  
有て、世語に誇るといへども、夕には白骨と成て、郊原に朽果  
る（新謡曲百番本「江藻髮」）

古人の云し伝へにも、朝には朝露にはこるといへども夕べには  
白骨と成て郊原に朽つる世のならひ（新謡曲百番本「義経」）

あしたには紅顏有て世路にほこるといへども、夕には白骨と成  
て荒原にくちぬる事、無常迅速の世のならひ（古典文庫本「笠  
寺」）

朝に紅顏有つて、世路にほこるといへ共、夕べには白骨と成て  
郊原に朽ぬ（古典文庫本「石竹」）

(二) 白 氏 文 集

海漫漫 直下無底旁無辺 雲湧煙浪最深処（海漫漫）

是は又浪の上、煙の底に沈みぬる、別れの程ぞ悲しき（謡曲叢  
書本「時有」）

彼海底に飛入ば、空はひとつに雲の波、煙の浪を凌ぎつつ、海  
漫漫とわけ入て、直下と 見れ共底もなく（古典文庫本「現在  
簪」）

○眼穿不見蓬萊島 不見蓬萊不敢歸 童男中女舟中老（海漫漫）



とうなんくわぢよが船の内、見ずは帰らじと誓ひけん、蓬萊宮と申すとも、是にはよまさらじ（新謡曲百番本「鳥廻」）

とうなんくは女が船の内、見ずは帰らじと誓ひけん、蓬萊宮と申共、是にはよまさらじ（古典文庫本「鳥廻」）

鉄撃珊瑚一両曲 氷写玉盤千万声（五絃彈）

織珊瑚を砕く一両曲、氷玉盤に落千万声（謡曲叢書本「月見」）

九華帳中夜悄悄 反魂香降夫人魂（李夫人）

九花帳の内にして、月の夜終此香を たかせ給ふぞ哀成（古典文庫本「唐反魂香」）

三千寵愛在一身（長恨歌）

連理の契り浅からず、三千の寵愛一身にあり（謡曲評釈本「清閑寺」）

馬嵬坡下泥土中（長恨歌）

長生殿のささめごと 千年の秋と契りしも、馬嵬の塵と消失ぬ（古典文庫本「藤房」）

太液芙蓉未央柳 芙蓉如面柳如眉（長恨歌）

芙蓉の顔ばせ柳の黛 さもみやびたる御粧ひ（古典文庫本「弘文成」）

其かたち妙にして 梨花一枝雨をおびたる粧ひ、未央の柳の春風になびくがごとくなり（古典文庫本「片山」）

攬衣推枕起徘徊（長恨歌）

実や衣をとり、枕をおすべき力もなく、苦しき心にせきかぬる、泪の露の消ゆる身の、置処なや恥づかしや（謡曲叢書本

「歌葉師」

玉容寂寞淚闌干 梨花一枝春帶雨（長恨歌）

其かたち妙にして 梨花一枝雨をおびたる粧ひ（古典文庫本「片山」）

七月七日長生殿 夜半無人私語時（長恨歌）

長生殿のささめごと 千年の秋と契りしも、馬嵬の塵と消失ぬ（古典文庫本「藤房」）

それ唐帝の古しへも、彼驪山宮のささめごと、いいもれそめて今の世に、わかれをしたふたねならん（古典文庫本「御影堂」）

在天願作比翼鳥 在地願為連理枝（長恨歌）

比翼連理の契りも、はやかれがれの身となりて（謡曲叢書本「范蠡」）

比翼連理の語らひも、変はれば変はる世の習ひ（謡曲評釈本「清閑寺」）

連理の契り浅からず、三千の寵愛一身にあり（同）

契は尽きぬ比翼連理、風吹きたゆむ太平楽（新謡曲百番本「定家桜」）

天にあらば比翼の鳥、地にあらば妹背山の、枝をかはせる松が枝の 千年をふるとかはらじと（古典文庫本「鬼狽師」）

比翼連理の其契り、天長く地久しく 浅からざりし中とかや（古典文庫本「拍手」）

比翼連理の御契り、世の例にもなりなんと、人のそねみぞ誠なる（古典文庫本「桐壺」）

天にあらば 比翼の鳥 地に又住<sup>マ</sup>ば 連理の枝ならん (古典文庫本「蝶女」)

天にあらば二星と成、地にあらば連理と、たがひに思ひかはしつつ (古典文庫本「法花寺」)

夫比翼のかたらひは二世の中に結び、偕老の契りは万年の外に念頤なり (古典文庫本「御台巴」)

哀や実往古は、比翼連理のかたらひをなし (古典文庫本「横笛」)

天長地久有時尽 (長恨歌)

天長く地久にいく万代の道ならん (謡曲叢書本「芳野」)

天長く地久しく 浅からざりし中とかや (古典文庫本「柏手」)

天長く地久に、幾万代のみちならん (古典文庫本「芳野行幸」)

○元和十年、予左遷九江郡司馬、明年秋、送客湓浦口、聞舟船中夜彈琵琶者 (琵琶行序)

かの樂天が潯陽の、江の辺りに流されて、琵琶を弾ぜし古へも、斯くやと思ひ知られたれ (新謡曲百番本「有子内侍」)

○離離原上草 一歳一枯榮 野火燒不尽 春風吹又生

りりたりげんじやうの草、一せい一こえい、やくはやく共つきず、春風吹て又生ず、是世の中の、ありさまなり (謡曲叢書本「薄」)

離離たる原上の草、墨墨たる白骨叢にまとはれて (新謡曲百番本「思出川」)

化作路傍土 年年春草生

御覽ぜよ年年の春草は生茂りて、刈払ふ人もなければ (古典文庫本「勝尾寺」)

臯鳴松桂枝 狐藏蘭菊叢

臯松桂の枝に鳴き、狐蘭菊の叢に、隠れて住めば我姿を、人は知らじと思へども (謡曲叢書本「現在殺生石」)

黄菊芝蘭さまざまに、臯松桂の枝に鳴き、狐らんでいの草に臥す (謡曲叢書本「月見」)

さも忙がはしかりし身の、心の花か蘭菊の、狐河より引帰し (新謡曲百番本「生田忠度」)

蘭菊の、花に住なる我姿、又顯はるる露の玉の (古典文庫本「篠田森」)

有時は 山路に深き松桂の 枝に臯物すごく (古典文庫本「姫路朝比奈」)

○莫对月明思往事 損君顔色減君年

彼樂天が月に對ひて、往事を思ふ事なかれと、いひしは妻に送りし言葉 (謡曲叢書本「錦織」)

○身後堆金柱北斗 不如生前一樽酒

人は身後の名あらんより、生前一盃の酒に如かずとこそ存じ候へ (謡曲叢書本「鴨長明」)

○合者離之始

合者定離のならひとは、逢は別れと 聞物を (古典文庫本「形見糸繰」)

実や通れえぬ、合者定離ぞと聞時は、逢は別れと思へ共 (古典文庫本「袖の湊」)

## (三) 体 詩

○行尽江南数十程

曉風殘月入華清 (杜常)

実行南の数十<sup>ハナ</sup>程、梅の匂ひの花衣、重ねて奇特見るやと

て (古典文庫本「伊勢語」)

○二十五弦彈夜月

不勝清怨卻飛來 (錢起)

又廿五<sup>ヤ</sup>絃、夜月に彈ずれば、帰鴈も飛去ぬ 風情やつらね置ぬ

覽 (古典文庫本「琴」)

緑樹重陰蓋四鄰

青苔日厚自無塵 (王維)

扨も我此山にわけ入り、四方のけしきを見れば、緑樹の重陰四

隣におほひ、青苔日々にあつうしておのづから塵なし (謡曲叢

書本「鳳来寺」)

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘

声到客船 (張繼)

月落ち烏啼て、夜半も更行鐘の声、夢もあだなる心かな (新謡

曲百番本「足引」)

謡ふや柳葉の、霜天に満ちしかば、江風漁火の紅の顔ばせも、

深きや酒の酔の内も (同)

○柴門流水依然在

一路寒山万木中 (韓翃)

柴門流水いぜんたり、一路寒山も、斯くやと思ひしら波の (謡

曲叢書本「鳳来寺」)

○曉紅輕拆露香新

独立空山冷笑春

春意自知無主惜

恁風

吹逐馬蹄塵 (崔露)

曉紅輕く折て露香あらたなり、独り空<sup>（傍訓井上本）</sup>山に向 (つ) て春を笑ふ、春<sup>（傍訓井上本）</sup>意はあるじの惜む事なきを、知 (つ) てほしいままに、風吹<sup>（傍訓井上本）</sup>て寺前の塵をなす、あら物すこの春の夕やな

(古典文庫本「多門天」)

遠上寒山石径斜

白雲生処有人家

停車坐愛楓林晚

霜葉紅

於二月花 (杜牧)

あれ御覧候へ、紅葉の最中にて候、げにや二月の花よりも紅な

りと、眺めし人の心も思ひやられて候 謡曲叢書本「立田物狂」

面色は二月の花よりも紅る也 (古典文庫本「金沢狸々」)

遠くかんざんにくればせつけいはるかなり、白雲生ずる所に人

家あらん、あら物すこの高根やな (古典文庫本「天狗倒」)

○大道本来無所染 白雲那得有心期 (張喬)

大道本来所染なし、白雲何ぞ心あらん (謡曲叢書本「高野参詣」)

夫大道本<sup>ト</sup>来<sup>リ</sup>所染<sup>ゼン</sup>なし、白雲<sup>ン</sup>何事<sup>ゴ</sup>ぞ心期<sup>キ</sup>あらん (古典文庫

本「竈之神」)

罷釣帰来不繫船

江村月落正堪眠

縦然一夜風吹去

只在蘆

花浅水边 (司空曙)

実や釣をやめ帰りさつて舟をつなぐず、江村月落て、まさに眠

(る) に絶たり、小舟とて一夜風吹されども、たくろくは山水

の辺 (り) に有 (古典文庫本「氷上眞本」)

○風飄碧瓦雨摧垣

卻有鄰人為銷門 (吳融)

実には風碧瓦を飄へして、雨垣を摧き、池は水草に埋もれて

(謡曲叢書本「恋草」)

○雲霞出海曙 梅流渡江春（杜審言）

雲霞海を出てあけ、ばいりう江を渡つて春なり（古典文庫本）

「睦月桜」

鳥宿池中樹 僧敲月下門（賈島）

鳥は宿せる池辺の柳、僧はたたずむ月下の門前に、顕れ出でたる鬼神のいきほひ、おもてをむくべき様ぞなき（謡曲叢書本）

「朱雀門」

鷄声茅店月 人迹板橋霜（溫庭筠）

一生住家おろそかにして、心はばうてんの月に嘯き、身は板橋の霜にただよふ（古典文庫本「諏訪」）

○行到水窮處 坐看雲起時（王維）

行て至る水の究る所、座して見る雲起る時（古典古庫本「御法」）

#### 四 新撰朗詠集

○三十五名之星躑 遙浮於水鏡之面 五万四千之土壤 自化氷壺之心（都在中）

三十五名の星躑は、遙かに水鏡の面に浮み、五万四千の土壤自ら氷壺の底に化す、あら面白の折からやな（謡曲叢書本「月見」）

○秋月夜閑聞案曲 金風吹落玉簫聲（金雲卿）

秋月夜閑にして曲を奏するをきく、金風吹落す玉簫の声（謡曲叢書本「五節」）

○酒軍在座 菟蘭之露未晞 僕夫待衛 鷄籠之山欲曙（紀育名）

夜もしらじらと明行けば、有つる姿は消消と、有つる姿は瓊樓の山、木隠れて失せにけり（新謡曲百番本「生田忠度」）

○新豊樹老籠名月 長生殿閑鎖黃昏（白楽天）

長生殿閑くして、黃昏をときせり（謡曲叢書本「月見」）

○茅屋無人扶病起 香爐有火向西眠（慶滋保胤）  
草庵人稀にして杖を扶けて立ち、香爐火有つて西に向つて眠る（謡曲叢書本「御菩薩」）

○潯陽江畔夜送客 楓葉荻花秋索索（白楽天）

音に聞 潯陽の江にきて見れば、楓樹荻花の秋の色 眺め妙なる気色かな（古典文庫本「陶淵明」）

尊猶南西 松花之色十廻（大江朝綱）

君が代は、尽きじとぞ思ふ松が枝の、幾十返りの色深く、猶光りそふ天が下（謡曲叢書本「月乙女」）

ながめやる、月は雲井に高安の、里をば猶もこひの松、十返り深き契りとして（謡曲叢書本「天王寺物狂」）

かへらぬ色は相生の、十帰る松の緑子の よむ言の葉はちりひちの（古典文庫本「伊勢語」）

松花十帰り優曇花の、花待得たる心地して、拝み申ぞありがたき（古典文庫本「行幸」）

千年の命ながらへて、猶幾年も姫小松の、わかく なりゆく十帰りの 緑木高く万歳も（古典文庫本「仲遠」）

木の下闇の百楓 モモカイデ 尽せぬ茂り数々に 十帰りの 松にひとし

き気色かな (古典文庫本「百紅葉」)

四海八鳴の外迄も、常盤の色や十帰りの、花咲ぬらし松山の、

梢を、高み白雪や つもらじ (古典文庫本「細谷川」)

鴛鴦瓦冷霜華重 旧枕故衾誰与共 (白楽天)

古き 衾古き枕 ひとり袂を片敷て、歎給ふぞ哀成 (古典文庫本「唐反魂香」)

(五) 百 聯 抄 解

花笑檻前声未聴 鳥啼林下淚難看

花檻前に笑<sup>シ</sup>で声未だ聞ずといへ共 (古典文庫本「鶯」)

花檻前に笑<sup>チ</sup>で声未聞ずといへども (古典文庫本「難波梅」)

花笑<sup>シ</sup>で物いはず、正法眼に鳥鳴いて涙なし (古典文庫本「七十二候」)

十二候)

花間蝶舞紛紛雪 柳上鶯飛片片金

花前に蝶舞 紛紛たる雪 柳上に鶯飛、片片たる金 (古典文庫本「二人兒」)

○花前酌酒吞紅色

月下烹茶飲白光

花前に酒を酌んで、紅葉をのむとかや (謡曲叢書本「鼓瀧」)

花前に酒を酌<sup>シ</sup>で紅色をなすとかや (古典文庫本「花宴」)

花前に酒を汲<sup>ク</sup>で紅葉を呑とかや (古典文庫本「牡丹」)

風射破窓灯易滅 燈を射て下付本 月穿疎屋夢難成 (杜荀鶴)

風破窓をひて灯火消安く、月疎屋を穿ちて夢なり難き閨の内に

(古典文庫本「野上物狂」)

風破窓を射て灯火消安く、月ををくをうがちて夢成がたし (古典文庫本「雪翁」)

(六) 本 朝 文 粹

家貧親知少 身賤故人疎 (橘在列)

家貧にして親知少く、身賤しうしては故人疎し、親しき者だに疎くなれば、他人は何とて訪ふべき (謡曲三百五十番集本「横山」)

家貧にしては親知すくなく、賤しき身には故人うとし、ただ世をなにとらむべき (謡曲叢書本「空也」)

実には、貧しくはしては親知遠ざかり、賤しきには古人うとしと、思へば消ゆる道芝の、露幾程の身ならまし (謡曲叢書本「孟宗」)

「孟宗」)

実には家貧にして親知少く、賤しき海士の身となれば (謡曲叢書本「留林寺」)

家貧にしては親知すくなく、賤敷身には故人疎し、親しきだにも疎くなれば (古典文庫本「郭巨」)

実や家貧にしては親知すくなく、賤敷身には古人疎しとかや (古典文庫本「上宮太子」)

○夫形者百年之旅館也 名者万代之嘉賓也 (高階積善)

人の形は百年の旅館なり、名は万代の嘉賓なり (謡曲叢書本「淨藏貴所」)



## (七) 漢 土 詩 句

○関関雉鳩 在河之洲 (詩經)

いかづち 忽に隨喜して、是や雉鳩の水鳥の、関関と声をやはらぐる (古典文庫本「豊浦」)

○蔽芾甘棠 勿剪勿代 (詩經)

惜しませ給ふ甘棠の、伐ること勿れ春風の (謡曲叢書本「守屋」)

○普天之下莫非王土 率土之濱莫非王臣 (詩經)

いづく王地に非ざれば、又安からぬ下水の (謡曲叢書本「現在殺生石」)

普天の下に住ながら、いかで悪事をなす野の狐、常ならぬ御狩に、心ゆるすなよ (同)

普天の下、王土にあらずといふ事なし (国民文庫本「内府」)

普天の下率土の内、王土にあらずと云ふ事なし (謡曲叢書本「美人揃」)

因果といひ勅命といひ、何か通れん率土のうちの、いづく王地にあらざるや (謡曲叢書本「野干」)

それ普天の下率土の内、何くか王土ならざるやと、主上に頼れ弓矢を取、甲冑を帯する身成けり (古典文庫本「楠」)

普天の下卒都の内王地にあらずと言事なし (古典文庫本「鞍馬判官」)

疎の人のいひ事や、普天の下卒土の内、いづくも王地にあらざるや (古典文庫本「陶淵明」)

○普天の下に住ながら、勅命争背べき (古典文庫本「松竹」)

○戦戦兢兢 如臨深渊 如履薄氷 (詩經)

いづく王地に非ざれば、又安からぬ下水の、薄氷をふむ、心なり (謡曲叢書本「現在殺生石」)

其いくばくは白波の、渡らんはあやふし、薄氷を踏むはせめてなり (謡曲叢書本「大般若」)

心もとけぬうす氷の、危き浪の上、おぼつかなくぞ覚ゆる (謡曲叢書本「范蠡」)

敵の宿へ入けるは、薄氷を踏む心地かな (古典文庫本「対面曾我」)

奢りを極め給へば、又世も 氷を踏にことならず (古典文庫本「藤房」)

○代木丁丁 鳴鳴嚶嚶 出自幽谷 遷于喬木 (詩經)

幽谷より出て喬木に移り、啾啾としてそれなく、其友を求る声あり (古典文庫本「七十二候」)

○屈原曰 举世皆濁 我独清 衆人皆醉 我独醒 是以見放 (楚辭)

世の人挙つてにぐれり、我独清し、されば時に脊けり (古典文庫本「屈原」)

○漁夫莞爾而笑 鼓枻而去 歌曰 滄浪之水清兮 可以濯吾纓 滄浪之水濁兮 可以濯吾足 (楚辭)

漁夫は是を聞よりも 莞尔と笑(つ)て、舟ばたを敲ひて、謡

ふや竿の哥(古典文庫本「屈原」)

滄浪の水、すめらば纓を、洗ふべし(僞訓下村本)(同)

力拔兮氣蓋也 時不利兮離不逝 離不逝兮可奈何 虞兮虞兮

奈若何(項羽)

望雲離といふ馬は、ひと足に千里をかける名馬なれども、膝を

折り黄なる涙を流し一足も行かず、離ゆかず離ゆかず、ぐい如

何せんと歎き給ひしとかや(謡曲三百五十番集本「横山」)

○大風起兮雲飛揚 威加海内兮掃故郷 安得猛士兮守四方(漢

高祖)

大風起つて雲飛揚し、威海内にくはへて古郷に帰る、なんぞ猛

士を得て四方の国を守らん(新謡曲百番本「松竹」)

大風起つて雲飛揚し威を海内に加へて古郷に帰り(古典文

庫本「韓信」)

○歡樂極兮哀情多 小壯幾時兮奈老何(漢武帝)

実や樂しび極まつて、必(ず)悲しび生ずる事、今身の上に白

菊の(古典文庫本「三河千寿」)

○一顧傾人城 再顧傾人国(李延年)

誠は一度笑んでよく国を傾くと、古人のいましめも、道理なり

と覺えたり(謡曲叢書本「往生院」)

つぬに国家は みだれがみの、けいせいけいこくの ためしな

れ(古典文庫本「竜」)

○瓜田不納履 李下不整冠(文選古詩)

梨下に冠をたださず、瓜田に沓をとらねば聖人の誉しうしつの

遊舞の道も達者たり(謡曲叢書本「宗貞」)

誰か言瓜田に履を入(れ)ざれと 李下にたださぬ冠も 直衣

も今は夏衣、やつれ果たる、身をいかにせん(古典文庫本「韓

信」)

○月明星稀 烏鵲南飛(曹操)

月明らかに星まれに、南に飛鵲の 渡せる橋に霜ふけて(古典

文庫本「閑羽」)

妾在巫山之陽高丘之岵 且為朝雲暮為行雨 朝朝暮暮陽台之下

(宋玉、高唐賦)

朝には雨となり、夕べには雲とたちのぼる煙には、ほすべき袖

をぬらすこそ、あいしやう離別の涙なれ(謡曲叢書本「浦上」)

慈悲の山たかうして、雲となり雨となる、めぐみのかげの不可

思議に、あはれ給へ觀世音(謡曲叢書本「經書堂」)

秋も名残か長月の、夕の空や村時雨、雲となり雨となる、木の

葉の風の音迄も心ぼそさの夕かな(謡曲叢書本「木幡」)

思へば夢の帰るさの、あしたには雲となり夕には雨と降る、其

とし月もいたづらに、只一時の夢の世と(謡曲叢書本「虎送」)

ゆふべの鐘の声、鳥の音もかすかにて、松風颯颯として雲とな

り雨となり、行方もいさや白波の(謡曲叢書本「濡衣」)

巫山の雲は忽、陽台のもとに消安く、消行身ぞと夕ばへの(古

典文庫本「宇治橋」)

今に絶せぬはたの音の、雲となり雨とふる 妄執をたすけ給へ

や（古典文庫本「呉原」）

朝の雲と見し花も、夕べの雨に降はてて、終には誰が残るべき（古典文庫本「四町」）

雲となり雨となる、陽台の時留め難く、花と散雪と消、金谷の春行衛もなし（古典文庫本「中将姫」）

またおなじ縁によりては、雨となり雲となり、人となる（古典文庫本「雅木」）

○白雪停陰岡 丹葩曜陽林 石泉漱瓊瑤 織鱗亦浮沈 非必絲与竹 （餘聞下村本） 山水有清音（左太冲）

白雪隱岡にとどまり、丹葩陽林を照す気色を眺め（古典文庫本「戴安道」）

石泉瓊瑤をすぎ 織鱗又浮（き）沈（み）必（ず）糸竹の、五音をからず（同）

采菊東籬下 悠然見南山（陶淵明）

折節淵明は、東籬のもとに立休らひ、悠然として居たりしが（古典文庫本「陶淵明」）

伝え聞（く）陶淵明は菊を東籬の下に把 （トリ 傍訓佐野本） 悠然として南山を見るといへり（古典文庫本「万葉菊」）

盛年不重来 一日難再晨 及時当勉勵 歲月不待人（陶淵明）

露命も同じ憂世の旅、五十年も過ぐる光陰の、時人を待たぬ理なり（謡曲叢書本「赤沢曾我」）

絆も長き闇路をば、何とか出でん年月の、光の陰惜しめ、時人

をまたぬ世なるに（謡曲叢書本「浦上」）

きづなも長き闇路をば、何とかはれん円月の、光の陰惜しめ、時人をまたぬ世なるに（謡曲叢書本「篋敦盛」）

光陰をしむべし、時人を待たざれば（謡曲叢書本「惟盛」）

きづなも永き闇路をば、何とか出む円月の、光りの影おしめ時人をまたぬ世なるに（古典文庫本「経盛」）

○元来も時人をまたぬ世の中なれば（古典文庫本「平太」）

○宅辺有五柳樹 因為号焉（陶淵明、五柳先生伝）  
いづくをそこと白菊の花もにふやいつもの、柳の門下 （傍訓下村本） 着きにけり（古典文庫本「陶淵明」）

○実迷塗其未遠 覺今是而昨非（陶淵明）  
今日は是にして、昨日の非をさとり（古典文庫本「陶淵明」）

○舟揺揺以輕颺 風飄飄而吹衣（陶淵明、帰去来辞）  
舟揺揺としてもつて輕颺し、風飄飄として衣を吹（古典文庫本「夢想松風」）

○三径就荒 松菊猶存（陶淵明、帰去来辞）  
三径荒について松菊尚存す（謡曲叢書本「朱雀門」）

舟に取乗薄陽の、旧宅に帰りきて見れば、三径も荒果（て）て、ただ松菊ぞ残りける（古典文庫本「陶淵明」）

○園日涉以成趣 門雖設而常閑（陶淵明、帰去来辞）  
門設けたりといへども常に鎖せり（謡曲叢書本「朱雀門」）

○雲無心以出岫 鳥倦飛而知還（陶淵明、帰去来辞）

雲無心にして以て岫を出(で)、鳥飛がごとくにうむで、帰る  
事をや、しらすらん(古典文庫本「陶淵明」)

○我醉欲眠君且去 明朝有意把琴来(李白)

我ええり、ねぶらんと思ふ なんちされ(古典文庫本「陶淵明」)

神傷山行深 愁破崖寺古(杜甫)

実に実に爰は処から、人跡年をふる寺の、愁ひは崖寺の古きに  
破れ、魂は山行の深きにいたましむ(謡曲叢書本「泣不動」)

春山無伴独相求 伐木丁丁山更幽(杜甫)

聞けば伐木たうたうとして、山かすかなる雲に聞え、嶺に答  
へ、谷にひびき、よべばこたふる山彦の(謡曲叢書本「祚国」)

伐木 丁丁として、是こそ鼓成べきか(古典文庫本「裸鬼」)

○今夜鄜州月 閨中只独看(杜甫)

閨中独見るらんと、いひしは杜子美がこよひの月に、いもがり  
こふる詩の詞(謡曲叢書本「錦織」)

○感時花濺淚 恨別鳥驚心(杜甫)

時をかんじては花もなみだをそそぎ、別れをうらみては鳥も心  
をうごかす事も、まことに随縁真如の月の(謡曲叢書本「松浦梅」)

梅

時を感じては、花にも涙をそそぎ、別れを恨ては、鳥にも心を  
驚す(古典文庫本「鶯鷺」)

時を感じては、花も涙をそそぎ、別れを恨みては、鳥も心を驚  
かす(古典文庫本「百合草若」)

○鶯鷺独不宿(杜甫)

されば杜子美が詩にも 鶯鷺独宿せずといへり(古典文庫本

「鶯鷺」)

○掬水月在手 弄花香滿衣(千良史)

水掬べば月手に移り、花を弄すれば香衣に満つ(謡曲叢書本  
「水尾山」)

花を弄すれば香衣にみつ、水を掬すれば月手にあり(古典文庫  
本「鶯」)

花を弄すれば、香衣に満(ち) 水を掬すれば月手にあり(古典

文庫本「難波梅」)

○渭流漲膩 棄脂水也 煙斜霧橫 焚椒蘭也(杜牧之、阿房宮

賦)

浴室に入て白粉の 渭流を漲らす、蕭蘭を焼て立出ぬ(古典文  
庫本「奈良晒」)

此夜一輪滿 清光何処無(伝賈島)

其時万山に雲つきて、明明とある青天に、一輪みてる夜の、清  
光いづれの処にか、至らぬくまもらし吹く(謡曲叢書本「吉

野琴」)

雲は万里に治りて、一輪みてる月の夜に 語りていざや明さむ

(古典文庫本「御菩薩池」)

○江月照松風吹 永夜清宵何所為(永嘉大師)

かうげつ照し松ふうふく、えいやのせうせいになところ  
ぞ(謡曲叢書本「惟盛」)

○朝開暮落渾閑事 祇要人知色是空（紹隆）

さりながら朝開暮落すべて閑事、唯要す人の色は空なる事を知  
るをとする詩の心は、色即是空なり（謡曲叢書本「朝顔」）

○疎影横斜水清浅 暗香浮动月黄昏（林和靖）

入江の梅の、木の本に、疎影横斜水清浅、暗香浮动月黄昏（謡  
曲叢書本「松浦梅」）

○含香体素欲傾城 山礬是弟梅是兄（黃庭堅）

夫れ梅を花の兄といひ、菊をば花の弟といふ事、色香妙なるゆ  
ゑなるべし（謡曲叢書本「翁草」）

百花の兄と云ふことも、此木をはむる心なりと、語るもよしな  
しや（謡曲叢書本「松浦梅」）

○予独愛蓮之出於泥而不染 濯清漣而不妖（周茂叔）

夫蓮は泥より生じて清きをしらしむるに、是は土中に生出た  
る事、末世とても有べからず（古典文庫本「鸚鵡僧」）

○人老簪花不自羞 花応羞上老人頭（蘇東坡）

人老いて花をかんざしにして、人恥ぢず、花は恥づべし老人  
の、頭へのぼる事を（謡曲叢書本「吉野詣」）

○水光瀲灩晴方好 山色空濛雨亦奇（蘇東坡）

ふりさけて見れば晴て正によし 雨も又奇なり（古典文庫本  
「回向院」）

春宵一刻值千金 花有清香月有陰（蘇東坡）

あはれむべしやをしむべき、春の夜の一時、月になれや花の色  
かげ諸共にながめん（謡曲叢書本「素拜桜」）

明け暮れ空を悲しびて、春宵一刻値千金と、をしむ心も有なれ  
ば（謡曲叢書本「玉津島竜神」）

抑春の夜の一時、花に清香月に影、をしまるべしや時も実に、  
及ぶかたなき陽春の空（謡曲叢書本「鼓滝」）

実にも春宵一刻の、惜しまるべしやくわしつこのよの、松風まで  
も心して、有難かりける時節かな（謡曲叢書本「泣不動」）

然るに春宵一刻の盛りをなし、一夜にかれて見えければ、帝不  
思議に思し召し（謡曲叢書本「不斷桜」）

価はあらじ春の夜の、花に清香月はかすめる、明ぼのの空かけ  
て少女は雲路によちのばれば（謡曲叢書本「吉野詣」）

実や春宵一刻千金とは、花に清香月に影、今此の時に知られた  
り（新謡曲百番本「柏木」）

もとよりうたた寝の夢ばかりなる、春宵一刻値千金の、夜はほ  
のぼのとぞ明にける（新謡曲百番本「鎌倉山」）

夫春宵一刻の、花の木陰を洩る月は、散懸るをや曇ると見るら  
ん（新謡曲百番本「更科祐近」）

実や春宵一刻 価千金と聞時は、貧家無興とおぼすなよ（古典  
文庫本「閑居」）

価 千金の夜の興 とはぬ人をも恨みじな（古典文庫本「戴安  
道」）

久堅の 月すみ渡る春の夜の、価 千金もまのあたり（古典文  
庫本「多門天」）

春宵一刻値千金、実類ひなき春の夜や（古典文庫本「常縁」）



あら面白の折からやな、花に清香月に影、実千金にもかへじとは、今此時成ぬべし（古典文庫本「落桜」）

それ春宵一刻価千金、花に戯れ給ひつつ（古典文庫本「聆川」）  
夫四季草木のたわぶれおほしといへ共、何れの時にも越て猶、  
春宵一刻、価千金（古典文庫本「花宴」）

あら面白の花盛やな、春宵一刻其あたひ、千金にも替じとは、  
理り成ける詠めかな（古典文庫本「花見」）

実惜むべしおしむべしや、春宵一刻 あたひ千金、花にきやう  
有（古典文庫本「東山」）

実や春宵一刻其あたひ、千金にもかへじとは、理りなりけるな  
がめかな（古典文庫本「緑丸」）

#### 柳緑花紅真面目（蘇東坡）

夫花山に塵なうして、水緑に花紅なりといへども、いづれの時  
か去来して、柳は緑花はくれなる（謡曲叢書本「祇園」）

一味の雨のふりぬれば、皆成仏の誠にて、柳は緑を其儘に、花  
は紅の色色（謡曲叢書本「西岸居士」）

柳は緑花は又、紅に咲く古寺の、薨は雲を凌ぎつつ（謡曲叢書  
本「太子」）

しばらく向真故来して見れば夢もなき物を、柳は緑にて花は紅  
の色のみ（謡曲叢書本「野干」）

されば善悪の二つ仏衆生、柳は緑花は紅にして 皆其色を顯す  
（古典文庫本「饗庭」）

土となり人となり、物となり柳は緑り、花は紅る 種はひとつ

種なれど、色は品品かはりゆく、形となれる心かな（古典文庫  
本「姥が火」）

空も 柳の緑にて 花も紅も隔てなき、木々の梢の其まきに、  
草木国土皆 仏体としるぞ嬉しき（古典文庫本「鴛鴦」）

天地未開かざる さきを何とかしらま弓 あたらぬ迄も、はず  
さざる柳は、をのづから緑に、花はをのづから紅なる 山郭公

月雪は（古典文庫本「寒山」）

糸を乱せる柳は 緑りなる色を其儘に、錦を 織てふ花は又  
紅るの色の外ぞなき（古典文庫本「徑山寺」）

柳は緑花は又、只紅るの色色の、時に心を慰めよ（古典文庫本  
「四季」）

有情非常皆因縁にしたがひて 柳は緑花は紅る（古典文庫本

「荳蔻」）

言句をはなれ、文字を放下して、柳はみどり 花はくれなる色  
（古典文庫本「蜷川」）

柳はみどり花は紅る、其色色ぞはかなけれ（古典文庫本「雅  
本」）

○壬戌之秋 七月既望 蘇子与客泛舟 遊於赤壁之下 清風徐来

水波不興 举酒属客 誦明月之詩 歌窈窕之章 少焉月出於東山之  
上 徘徊於斗牛之間 白露橫江 水光接天 縱一葦之所如 凌万頃

之茫然 浩浩乎如馮虛御風 而不知其所止 飄飄乎如遺世獨立 羽  
化而登仙 於是飲酒樂甚 扣舷而歌之 歌曰、桂櫓兮蘭漿 擊空明

兮泝流光 渺渺兮予懷 望美人兮天一方（蘇東坡、赤壁賦）

夜遊をなして夜もすがら、酒を挙げ客に属し（謡曲叢書本「赤壁」）

昔元豊の頃、初秋の今宵うらなき友を誘ひ、同じく舟を浮べて赤壁に遊ぶ。折しも風そよそよと来て波もなく、酒を挙げて諸共に、明月の詩を口ずさび、窈窕の章を歌ふ。暫くありて、月は東の山の端にほのぼのと晴れやかに、星のまにまに立ち渡る、身に白露のおのづから、江に横ざりて水の光、空色にまじはる、芦の折葉の、おのがまにや流るらん。風和らかに吹き送り、とどまる方も知らばこそ、飄飄と世を忘れ、仙を得たるが如くなり。盃も重なれば、舷をたいて、謡ひ奏で戯るる、桂の櫂蘭の漿、そことなく棹さして、波のうねうね押し渡る、心も空に面白や（同）

○客有吹洞簫者 倚歌而和之 其声嗚嗚然 如怨如慕 如泣如訴 余音嫋嫋 不絶如縷 舞幽壑之潜蛟 泣孤舟嫠婦 蘇子愀然正襟危坐而問客曰 何為其然也（蘇東坡、赤壁賦）

其中に客人、笛竹を調べつつ、歌を和らげて、吹き合はせ吹き合はせ、其声の妙なるや、恨むるが如く又、慕ひ泣くに異ならず、余音よわよわと、絶えざる事、絲筋のいと深き、深谷の底の鱗も、やや立ち舞はんばかりなり、ひとり漕がるる海人小舟、綱手悲しむ理り、誠知られて客人も（謡曲叢書本「赤壁」）  
○西望夏口 東望武昌 山川相繆 鬱乎蒼蒼 此非孟德之困於周郎者乎 方其破荊州 下江陵 順流而東也 舳艫千里 旌旗蔽空 酺酒臨江 橫槊賦詩 固一世之雄也 而今安在哉（蘇東坡、赤壁賦）

まづ西に見えたる県は何と申し候ぞ あれは江夏県と申し候 扱又東に當つて、山川相繆つて木深き陰の見えたるは、如何なる処にて候ぞ あれこそ武昌県と申して、古へ魏の武帝の、周郎にたしなめられし処にて候、さりながら、武帝は文武の達者にて、其荊州を破りし時は、千里に舟を浮べ旌旗空を蔽ふ、それのみか、矛を横たへて詩を賦し給ひし人なれども、今は昔になり果てて、故もゆかりも亡き跡や（謡曲叢書本「赤壁」）

○客喜而笑 洗盞更酌 肴核既尽 杯盤狼藉 相与枕藉乎舟中 不知東方之既白（蘇東坡、赤壁賦）

盃を洗ひて、夜もすがら共に汲む程に、東雲もしらしらと、はやあさまにもなりなん（謡曲叢書本「赤壁」）

○是歲十月之望 步自雪堂 將歸于臨臯 二客從予過黃泥之坂 霜露既降 木葉尽脫 人影在地 仰見明月……月白風清 如此良夜何 客曰 今者薄暮 舉網得魚 巨口細鱗 狀如松江之鱸 顧安得酒乎 歸而謀諸婦 婦曰我有斗酒 藏之久矣 以待子不時之需（蘇東坡、後赤壁賦）

げにげに後の遊びといふも、同じき年の十月の望、雪堂よりも臨臯に、歸りし時の事かとよ、折ふし霜露既に降りて、木の葉も落ちて月清く、風も涼しき夕暮に、二人の友は網をあけて、魚を得たりと喜べば、東坡は之を見るよりも、酒はありやと婦に問へば、中々の事斗酒ありと（謡曲叢書本「赤壁」）

○於是攜酒與魚 復遊於赤壁之下 江流有声 斷岸千尺 山高月小 水落石出 曾日月之幾何 而江山不可復識矣 予乃搢而上 履巉巖

披蒙茸…… 劇然長嘯 草木震動 山鳴谷応 風起水涌 予亦悄然而悲 肅然而恐 凜乎其不可留也 反而登舟 放乎中流 聽其所止而休焉 時夜將半 四顧寂寥 適有孤鶴 橫江東來 翹如車輪 玄裳綺衣 戛然長鳴 掠予船而西也 (蘇東坡、後赤壁賦)

聞くよりも又、赤壁に、遊べば流れも声ありて、切り岸も高く聳え、万代も尽せぬ巖に、登り嘯けば、山も鳴り谷響き、すさまじければ立ち帰り、又舟に乗り、風のまにまにただよひて、歌ひ楽しむ折から、我も来りて舞ふなり (謡曲叢書本「赤壁」) すはや此夜も半ば過ぎて、四方の気色も淋しきに、風に臨んで盤旋と飛びめぐる、姿は車輪の如くなるが、天を響かす千代の声、まのあたりなる奇特かな (同)

不思議やな月も隈なき水の面に、東より来るものを見れば、玄裳綺衣の仙禽なり、其名に聞えし舞をまひ、夜すがら我に見せ給へ 仰せに随ひ舞はんとて、翅を伸べて拍子にあて、戛然と鳴いて 舞ふとかや (同)

○須臾客去 予亦就睡 夢一道士 羽衣翩跹 過臨臯之下 揖予而言曰 赤壁之遊樂乎 問其姓名 俛而不答 嗚呼噫嘻 我知之矣 疇昔之夜 飛鳴而過我者 非子也邪 道士顧笑 予亦驚悟 開戶視之 不見其処 (蘇東坡、後赤壁賦)

今は何をか包むべき、我は夢中の道士なるが、今宵の月の面白さに、姿をかへて来りたり そもや夢中の道士とは、さてはそのかみ東坡居士の、後の遊びに伴ひし、玄裳綺衣の仙禽なるか (謡曲叢書本「赤壁」)

五蘊自元可皆空 緣底平生愛此躬 守塚幽魂飛夜月 失屍愚魄嘯秋風 (伝蘇東坡)

五蘊もとよりは皆空 何によつて平生此身を愛せん、苦を守る幽魂は、夜月に飛び、屍を失ふ冥魄は、秋風に嘯く、あら心凄の折からやな (新謡曲百番本「生田忠度」)  
五蘊本来是皆空 何によつてか此身を愛せん それ塚を守る幽魂は夜月に飛、屍を失ふくばくは秋風に嘯く、あら物淋しの夜すがらやな (古典文庫本「高館」)

(六) 本 朝 詩 句

離家三四月 落涙百千行 万事皆如夢 時時彼蒼 (菅原道真)

是や此北野の神の御詠にも、其かみや家をはなれて三四月、落つる涙は百千行、万事は皆夢と、さむる夜の月の都 (謡曲叢書本「御室経正」)

里の長驚き参りあひ、時の不祥を悲しみて、百千行の涙を流し、涕哭する事限りなし (謡曲叢書本「休天神」)

家を離れて三四月、おつる涙ははく千行、万事みな夢のごとし、うつつと見るもさだめなき (国民文庫本「菅丞相」)

落る 涙は百千行、万事は皆夢のごとしと、御身に たぐへて詠じつつ (古典文庫本「鶯」)

落る 涙は百千行 万事は 皆夢のごとくと、御身に たぐへて詠じつつ (古典文庫本「難波梅」)

○恩賜御衣今在此 捧持毎日拜余香 (菅原道真)

あら有難の御事や、恩賜の御衣にあらねども、余香を拝し御身にそふ、直衣姿は恥かしながら、あはれび給へ法の人（謡曲叢書本「粟津采女」）

駅長莫驚時変改 一栄一落是春秋（菅原道真）

承相是を感じ給ひ、駅長驚く事なけれ、時変の改る事を、一栄

一落是春秋、遁るべきにもあらずとて（謡曲叢書本「休天神」）

昨為北闕被悲士 今作西都雪恥戸 生恨死欲其奈我 今須望

足護皇基（菅原道真被太政大臣之後託宣）

天満天神もゆるぎ出させ給ひつつ、北闕の悲しみ西都の悦び、今

此時にあひに逢ふ、宜禰が鼓も数至れば（謡曲叢書本「休天神」）

きのふは北闕に悲しみを蒙る士と成、けふは西都に恥を清むる

神と成て（古典文庫本「一夜天神」）

きのふは北闕に、かなしびをかうぶり、けふは西都によるこび

の、親子あひぬる旅衣、北野の利生なりけり（古典文庫本「北

野物狂」）

誠に生ての恨死ての悦びとは成ぬれ共、三熱の苦しみ猶隙なき

故に、夜な夜な結縁申なり（古典文庫本「経山寺」）

昨日は北闕に <sup>カバネ 傍訓 鴻山本</sup> 悲しみを蒙る身なれ共、けふは <sup>西都に、恥を</sup>

雪むる <sup>戸 たりと</sup> 御神感あらたに、生ての恨死しての悦

び、普しや <sup>アマミツ 傍訓 鴻山本</sup> 天満 此御神ぞたつとき（古典文庫本「小式部」）

我北闕のかなしみをうくるといへども、終に西都の喜びをなす

（古典文庫本「北野葛城」）

笙歌遙聞孤雲上 聖衆来迎落日前（寂照）

笙歌遙に聞ゆ孤雲の上、聖衆来迎す落日の前、や、初夜の称名  
あら有り難や候（謡曲叢書本「御菩薩」）

笙歌遙に聞えきて 報謝の舞を、まふとかや（古典文庫本「甘

糟」）

笙歌はるかに聞ゆこうんのうへ、聖衆来迎す落日の前とかや

（古典文庫本「片山」）

笙歌遙に聞ゆ孤雲の上、聖衆来迎す落日の前（古典文庫本「破

来頓等」）

緑樹影沈魚上木 月浮海上兎奔浪（自休蔵主）

さながら花も波の梢に見え、緑樹影しづんで魚木にのぼる、魚

かと思へば尋ぬる獅子の影が、水にうつりたるはいかに（謡曲

叢書本「獅子」）

緑樹陰沈んで、魚も梢にのぼり、月海上に浮んでは、兎も浪を

走れり（新謡曲百番本「鳥廻」）

緑樹陰沈むでは 魚木にのぼる気色あり、月海上に沈んでは

兎も浪や走るらん（古典文庫本「江嶋竜神」）

男女の隔は浪の上 兎は走る水の玉（古典文庫本「鏡池」）

所は真名鶴の、魚木にのぼる風情有（古典文庫本「方浦」）

海上遙に見渡せば、大江の岸の柳陰、緑樹陰沈むで、魚も木に登

る、月海上に落、兎波を走るか面白きよ（古典文庫本「漁翁発心」）

緑樹陰しづむでは、魚も梢にのぼり、月海上に浮むでは 兎も

浪をはしれり（古典文庫本「鳥廻」）

緑樹影沈んでは、魚も梢にのぼるらん（古典文庫本「北国落」）